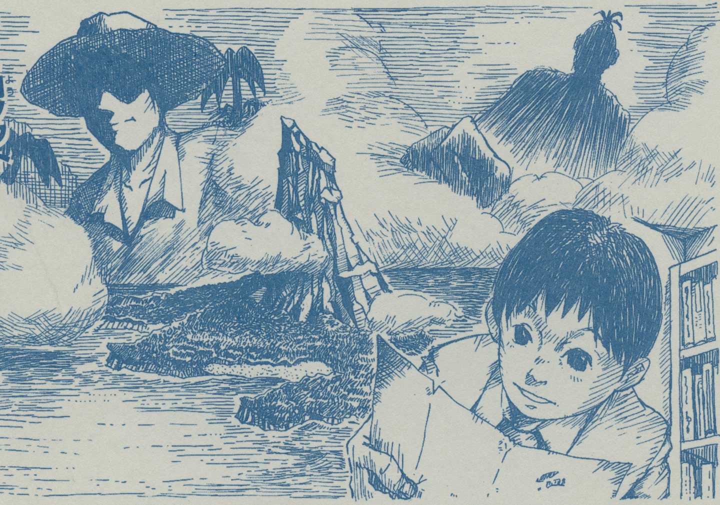
巨人島からの手紙

～The Story about "DoShin the Giant"～

連載第1回

作：Disc Drive Tribe

64DD用ソフト『巨人のドシン1』の世界を旅した青年が綴る、不可思議なストーリー連載開始！



これから紹介させていただくのは、とある青年から弟宛てに届いた手紙です。いったい、兄がどこからどのような手段で、また、弟に何を伝えようとして、このような手紙をよこしたのかは不明です。なぜなら便箋には、乱れた筆跡で世間の常識では推し量れない不思議な世界でのできごとが書きつらねてあるばかりなのですから！

実をいいますと、ここに書かれていることを、こうして公開することには若干の躊躇を覚えもします。この手紙の内容は、わたしたちの暮らすこの現実社会、そこから逸脱してしまった者の、とるに足らない世迷い言ととらえられかねないからです。

なにはともあれ、この不可解な手紙に何が書かれていたか、あなた自身で読んでみてはいただけないでしょうか。



俺はしばらくの間、この島に逗留し、巨人がこの島で何をするのか観察していこうと思う。それは、学術的な好奇心からではない。「ドシ～ン、ドシ～ン」と島中にこだまする巨人の足音を聴く度に、全身に鳥肌が立ち、心臓がドクドクと脈打ち、不思議な昂揚感に包まれるのだ。それは、俺にとってこれまで経験したことのない、甘美な快楽なのである。

巨人は本当にいた。俺は見た。そいつは黄色い色をした巨人だった。

巨人が現れたのは、俺がこの島にたどり着いてから四九日目の夜明けだった。

それまで、この南の島は、まるで時間が止まってしまっているかの様に、なにごともなくのどかで、俺は島民たちとともに太古の時代同様の暮らしを送っていた。

俺は、巨人の登場をある予測（その予測については後でまた記す）をもって待ち続けていた。そしてその予測は見事に的中し、とうとう巨人に出会えたというわけだ。出会えたといっても、遠くからその姿を見ただけなのだが。そしてその日以来、巨人は頻繁に我々の眼前に現れるようになった。

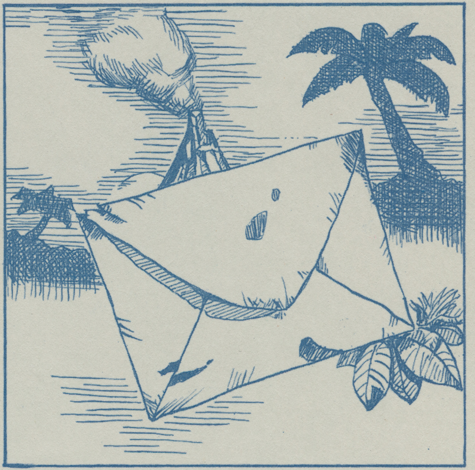
巨人は必ず夜明けと共に現れ、そして、昼と夜の境目、空気の全てがせつないオレンジ色に染まっていく中、まるで溶け込むように姿を消してしまう。



……太陽よりも高く魂を飛翔させようと踊り続ける人々が集うビーチの狂熱、失われた都市の眠る深海での絶対的な孤独……俺は旅に出てから、様々な土地を巡り、数多くの不思議な経験をうんできた。だが、この島は最も特別な「感じ」がしている。一度知ってしまうと後戻りできなくなるような、ある「感じ」だ。その感覚の正体は一体何なのか？　その秘密をつかめたときが、長い長い旅の終わり……俺が家に戻るときだろう。

この手紙のことは、ふたりだけの秘密だ。父さんと母さんは俺のことを心配しているだろうが、決して話してはいけない。男と男の約束だ。おまえを信じているよ。だっておまえは俺の弟だものな！

ヒデキ兄さんより



いかがでしょうか？

「兄さん、正気なの？」

いきなりこのような手紙を読まされても当惑するばかりなのは、弟であるヨシノブも読者の皆様と同じでした。しかし、兄から弟へと届けられた手紙はこれだけではなかったのです。

（次号に続く）

DDT通信その1

7月号

『巨人のドシン1』

●

ディレクター

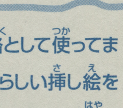
飯田和敏

DDTはプロレスの技の名前ですけど、僕たちはDisk Drive Tribeの略として使ってます。現在のメンバーは僕と、全体を仕切る相良伸彦（元雑誌編集者）と素晴らしい挿し絵をバリバリ描く山崎康（芸大在学中）の3名。最初に名乗りをあげたのは僕たちだけど、「早く出ないかな～64DD！」と思ってる人達もみんな、DD族だ。仲間だ仲間。ウッホッホイ。

DDTの意味をすこしほり下げて考えましょう。英和辞書レベルだと「レコード運転族」。そこからちょっとジャンプして「回転体運転族」と僕は言いたい。ぐるぐる回る旅だ。かっこいいじゃん、スパイラルじゃん。でも、堂々巡りにならないように自戒が必要。

ゲームの方は、最後の仕上げをやってます。最新情報はホームページ「キョジン・コム」(http://www.kyojin.com/)で公開中。

――――――――――じゃ、全6回のこの連載。最後までよろしくね！



チームDDT 原案・文／飯田和敏 構成・文／相良伸彦 画／山崎康

この三角形、1～6まで全部集めると、いいことあるかもよ。→

巨人1